

神奈川同窓会春の行事報告

平成29年度「6月能楽鑑賞」＜能（黒塚）、狂言（附子）＞

実施月日 : 平成29年6月23日（金） 9~15時 はれ
集合鑑賞 : 東急東横線横浜駅南改札口 国立能楽堂 能楽鑑賞
参加人数 : 30名（男性14 女性16）
幹事 : 勝山悌治 古本教子 渡邊久江
写真撮影 : 寺村紀美夫
報告 : 勝山悌治

東急東横線横浜駅9：19発急行直通で37分、北参道駅下車、ゆっくり10分程歩いて国立能楽堂到着、写真撮影の後、資料展示室で入門展示の面や装束、絵画資料など所蔵の能楽資料を中心に、能楽の基礎的な知識を交えてわかりやすく展示紹介されており、大変感銘を受ける。

11時より、高校生中学生で満席の中、我々数十年前の学生、30人が最高の正面席で、恐ろしい鬼女の能（黒塚）、滑稽な狂言（附子）を堪能する（下記ご参照）。

今回の流派は、シテ（主役）五流派（観世・宝生・金春・金剛、喜多）の中の金春流である。

能は今回初めて鑑賞したが、数回観ている歌舞伎とはまた違う魅力に、引き込まれそうである。

国立能楽堂前

能舞台



能 黒塚

諸国行脚する山伏一行。奥州の安達が原（福島県二本松市）で行き暮れ、女の住む荒野の一軒家に宿を借ります。山伏のために、この世の無常を嘆きつつ糸車を廻して見せる女。夜も更け、薪を取りに行く間、自分の寝屋を覗かないようにと言われた山伏たちですが、従者が我慢できずにこっそり覗くと、そこには屍の山が。慌てて逃げ出す山伏たち。その後、女が鬼と化して襲いかかりますが、山伏に祈り伏せられて、闇に消えてゆくのでした。

黒塚（くろづか）は福島県二本松市にある鬼婆の墓、及びその鬼婆の伝説。

安達が原に住み、人を食らっていたという「安達が原の鬼婆」として伝えられている。黒塚の名は正確には、この鬼婆を葬った塚の名を指すが、現在では鬼婆自身をも指すようになっている。

「黒塚」の場面



狂言 附子 (ぶす)

主人は外出することになり太郎冠者と次郎冠者の二人に留守番を言いつけます。桶に入った附子を置いておくのでよく番をするようにとのことですが、附子の方から吹く風に当たっても死んでしまうほどの猛毒だそうです。しかし、留守番している二人は附子が気になって仕方ありません。扇で仰ぎながら桶の中を見ると、黒いものがあります。見てしまったら太郎冠者は食べたくなくなってしまいます。思い切って一口食べてみると、なんと毒とは主人の真っ赤な嘘、それは砂糖でした。二人は競って食べ始め、つい夢中になって全て食べ尽くしてしまいます。さあ、二人は言い訳を考えた末に、主人が大切にしている掛墊と茶碗を壊してしまうのでした。主人が帰ってきたので二人は掛墊と茶碗を壊してしまったので、死んでお詫びをしようと、毒という附子を食べたが死ねず困っているという。してやられたと困った主人は、やるまいぞやるまいぞと二人を追いかける。

「附子」の場面

